

半田智久（日本構想学会グレートブックスセミナー実践研究会）

Motohisa HANDA (JSSI Practical Research Circle for Great Books Seminar)

いま一度グレートブックスとはなにか

グレートと語られる対象には、当然それに足るだけの根拠がはっきりあるはずだ。グレートブックス、偉大なる書物たちについていえば、数百年から数千年という時のスパンをもって存在してきた対象であり、そのあいだに吹きつけた幾多の風雪をのり越え、なおこの今も人びとの日々の暮らしと共に瑞々しい姿をもって息づいている。その事実が端的に「グレート」であることの証となっている。

日々の暮らしと共に、とは奇異な表現に感じるかもしれない。それらがわたしたちの日常に馴染みがあるとは思えないというのは当然の感覚だろう。しかも彼らはその長き生涯のほとんどにおいて、歴史上の遺物、すでに乗り越えられたもの、記念碑の類、といった声を浴びせられてきている。だが、グレートたるゆえんの証はそうした声が畏れ多き見過ごしのもとに発せられたものであり、またそれゆえに彼らもつ強さや偉大さの前ではいつもはじき飛ばされてきたことを示している。

もしそれらが本当に実質的な役割を終えた形見ほどのものにすぎないのなら、いずれも大図書館や博物館に保存されていればそれで十分であろう。ところが、少なくともここでのいうグレートブックスは売れ筋しか置いていないショッピングモールにあるような中規模書店にあっても、必ず一定程度、買い手の求めに応じて今日も待機しているのである。新刊書がますます短命になり、少し前のベストセラーも瞬く間に廃刊になっていく現代の出版界にあって、「いまどきそんなもの一体誰が読むの」などという軽口が浴びせられがちな偉大なる書物たちは、どっこいこんな時代、そんな時代にあっても確実に売れつづけている。つまり、グレートブックスのレゾンデートルは市場の答えとしてあるのだ。そのことからすれば、より適切

にはこんな時代だからこそ、求められている対象といってもよいのかもしれない。

「グレートブックスって古典のことでしょ」という確認もよく耳にする。「古典」ということばに込められる意味は学校教育の不幸な結果のひとつといつてよいと思うが、一般に大いに貶められている。多くの人が学科目としての古典に泣かされてきているからである。いまのどこにいてもほとんど通じないことばを延々とおぼえ、それこそ「何の役に立つのかわからない」という功利的なものの見方を、耐え難きを耐え、忍び難きを忍ぶ訓練を通じて反面的に身につけることがその目的になっているかの科目。古典という概念はその成果として現代的な実用の諸々から一番かけ離れたところに定位することになる。

その結果、グレートブックス＝古典という判断は、役に立たないことをあえてすることの意義を追い求める一種独特の差異化の象徴であるとか、典雅な貴族趣味の領域にあるたしなみの道具、あるいはまた幸運にも人生の余韻を得たときに、その閑暇を豊かに過ごすための特権の対象、といった解釈を水路づけていくことにもなる。

にもかかわらず、先に述べたように、そういうものであるかのグレートブックスの商品価値は、大衆消費社会を基盤とした現代の一般市場において認められているのである。つまり、グレートブックスの現実の生息域はある特殊な分衆に対する古典という域を離れ、かなり大きなエリアにおいてみんなのものとしてその座を占めているのである。とはいえそれらは誰もがもっているお馴染みのブランド品のような扱いを受けているわけではない。装丁を尽くして美術書や百科事典のように売られているというわけではないのだ。それとはまったく逆に、プラトンもゲーテもドストエフスキーもその大著の新品が小じゃれた人気のラン

チ一食より安価で流通している。つまり、この国ではグレートブックスがあきらかに庶民の財布にあわせて供給されている。これが日々の暮らしと共にあるグレートブックスの現実の生態なのである。

この実態について、この種の書籍は往々にして大学などで課題図書などになって、まとまった必要があるのでは、という推測もできるだろう。だが、これは実際にはほとんどありそうにない。こんにちの大方の大学の現場で、いわゆるグレートブックスがどのような位置を占めているか、少し眺めてみればすぐにわかる。毎年70万人からの大学卒業生のいったいどれほどがグレートブックスといわれる書物を読む機会に接しているだろうか。これは大学生への問いかけというよりも、大学の問題にゆきつく問いである。現代の大学は存立基盤のゆらぎのなかでグレートブックス的な価値にじつくりと向きあう自信を喪失しがちになっている。一方その代償行為として時代の流行ものをレミングの群れのようにあっちこちと追いかけてはあらゆる中途半端に煙幕をめぐらし、根本的な問題（腰を落ち着けて対象に向きあう研究や確かな学びができていないという現実）への対応から逃げている。それが大方の大学の実相だからである。だから、大学がグレートブックスの需要源になっているという可能性は残念なことほとんどないと思われる。

では誰が求め、買っているのか、といえば、まったくの個人、まさに匿名の人びと、むろんラーメンのごとく誰も彼もが行列をなしてというわけではないが、広く薄くコンスタントに求められているのだと思われる。上で述べた事情からいえば、むしろ大学を卒業してからのち、学生時代に学んでいたはずなのに学んでいなかったことの事実にあらためて気づき、それぞれの個人が人生の道程のなかで思い思いに買い求めているということが実相に近いと思われる。考えてみれば、それはそのはずで、グレートブックスはほとんどが人生にわたって通じるテキスト、いわば成熟した生涯学習社会におけるテキストなのであって、ライフステージのごく一時期に求められる類の記憶競争のためのワークブックとはわけが違うのである。

だから当然、それは古語を読解するための対象ではなく、その内容において、やはりすたりのない第一級の傑作、まさに元来クラシック (classic)

ということばがもつ意味を体現したものとして存在しているのである。どういう意味で傑作なのか、やはりそれはその作品の内容の完成度もさることながら、そのあとにひとつの流れをつくりだしたという歴史的事実があること、またそれだけの力が宿っているという点で傑出しているのである。言い換えれば、グレートブックスはものの見方、考え方、それは結局、人間の知のありようとか枠組みといってもよいわけだが、その点においてオリジナリティをもち、知のストリームを革新した力に溢れているのである。その人知の極みでもあるペンの力が、わたしたちの関心事である構想力を豊富にチャージしたものであることはいうまでもないのだが、その点をもう少し深めてみたい。

構想： コンセプトをめぐる

いつの間にかわたしたちの日常は社会的な強迫神経症ともいべき状況にとり込まれている。ただ何気なく目移りしてそのときどきの気分で選択している商品が、その蓋然的な選択の集約の結果として売れ筋となり、あるいは寿命を決し、市場予測と商品開発に直結していく。一步退いてみると、その偶然の揺らぎに対してあまりにも忠実、強迫的に振る舞っているわたしたちの姿がみえる。強迫神経症に陥った人は、その強迫行動がほとんど無意味で馬鹿げたことと知りながら、ただ不安ゆえにそうせざるを得ないところに迷い込んでいる。わたしたちの日常もそれと大差ない状況にある。

そういう時代の空気のなかで生きているがゆえに、わたしたちが心の奥で求めるものは確かな方向性やその抛りどころになる力、となるのだろう。ここ数年というもの「構想」ということばをタイトルにつけた新刊本が毎月欠けることなく実に多様な分野から発刊されつづけている。その第一の理由がこれまた市場原理に基づいていることはいうまでもない。極端な場合、内容が構想にかかわることかどうかよりも、書名のネーミングにおいて、そのことばに対する強い需要が考慮されたと思われるものもある。毎月必ず出版されているという事実からすれば、これもまた強迫的に求められていることからのひとつになっている。

その書名につけた「構想」ということばに著者たちが込めている意味はさまざまだが、集約すれば「ビジョン」「デザイン」「コンセプト」という

概念に分かち解釈できる(半田智久「構想を語る著者たちは「構想」の意味をどのようにとらえているか」構想 3, 87-106, 2004)。ここでいわれるコンセプトとは漢字表記の「概念」という用語が第一義的に指す意味というよりも、まさにこのカタカナ表記が似合うそれである。つまり、「この商品コンセプトは以下のとおりです」とか「今年のお祭りのメインコンセプトは……」といった語りでなされるときの意味であり、テーマ、理念、意味づけ、性格、方針といった意味合いがミキシングされて、それがことばによって表現されているのである。

ここで地味ながら重要な点は最後の部分「コンセプトはことばによって表現されている」ということである。新車なり新曲なり福祉会館なりのコンセプトが示されるとき、それがドン、シャン、ピーンといったかたちで図や映像なりのイメージや音で示されたとしたら、それはコンセプトができていないとメッセージしているようなものである。

つまり、コンセプトはロゴスの世界を基盤にして成り立つ。そのようにいうと、コンセプトが何やらことばと論理の世界に縛られたお堅いもののように思われるかもしれない。だが、実はその反対である。オーディオ・ビジュアル様式で提示されるコンセプトがありえないというのは、視聴覚的なイメージがおのずともつ知覚的な形象がコンセプトに不可欠なイメージーションの自由度を大きく制約してしまうからである。ことばで表現されるロゴスの世界は一見、ことばをはっきりと規定してしまうかの印象をもつ。ところが、実際はその反対で、ことばによる表現は行間の意に代表されるコノテーションを携え、受け手のそれぞれにイメージの喚起を委ねる自由性に富んでいる。すぐれたコンセプトはその多様に展開しうるイメージ喚起の幅と可能性を見越しながら、その上で時空のゆらぎに抗する強靱さをもち、共約可能な意味と価値を伝えるように練りあげられている。この作業はまさに構想の過程そのものである。つまり、構想の意味に含まれているコンセプトというファクターはそれ自身の成り立ちが構想に依拠しているわけである。このフラクタル性は構想が時間的に重層した創造過程のなかに展開されていることも示唆している。

ことばは化学物質のようなもので、他との組み

合わせや、その化合がなされる条件によってかなり多様な意味生成をもたらす。それに加えて、ことばは化学物質と異なり、そのもの自身が生き物のように時の流れとともに含意を変化させる。したがって、固定した組み合わせ一覧による結果の意味生成表といったものはあっても役に立たない。しかも、その組み合わせによる新たな意味生成は必ずしも偶然の産物であるわけではなく、人が意図的にデザインすることでもなされていく。すぐれたコンセプトメーカーが創造的な思考におけるデザイナーという像に見事に重なるのはそのためである。

また、この場合の創造作業はかたちの美しさ(ここでは修辭的な側面)や機能性ととのバランス、あるいは DA ノーマンが著書『エモーショナル・デザイン』でいうような情動を揺さぶるデザインといったところに注がれることはもちろん、それ以上に先に述べたようにことばが意味生成しうる可能性の幅や奥行きを状況的に見通す力、すなわちビジョンをもった創造性に依拠している。

そうした眼力のもとでデザインされたコンセプトは意味生成とイメージ喚起に可塑性の高い自由度をもつと同時に、新しい視野や見方への覚醒を促し、それまでにあった概念の枠組みを超出する力を宿す傾向が高まる。これは『科学革命の構造』で T クーンが革命の過程について分析したパラダイムシフトの瞬間に要請され働く力である。そうしたコンセプトは革命につきものの、マニフェストとしての扇動性(agitative)をもち、同時にその同音異義の先導性(initiative)を携えている。まさにこうしたビジョナリーなコンセプトのデザイン構成体こそ「構想」の典型的な姿といってよいだろう。

構想とグレートブックスの間柄

革命におけるパラダイム転換、アジテーションとイニシアティブという性質を宿す構想。こうした表現をすると、何やら大時代的な政治世界に迷い込んだかの気配が漂ってしまうかもしれない。しかし、少しだけ表現を変えたイノベーションや改革といったことばは、こんにちわたしたちがかかわるいろいろな世界のどこの領域でもほとんど日常的な課題として書かれ、語られ、叫ばれている。一家庭のリフォームにも一個人のエステティックにしても相同であり、まったくの日常の

水準にある話である。

現代に生きるイニシエーター＝構想者の代表格といえば、アップルコンピュータのSジョブスの名をあげることができるだろう。その彼が最近もっとも熱をあげて議論したことがら、自宅にどのメーカーの洗濯機を購入するかをめぐっておこなわれた家族会議だったという逸話が伝えられている。最大限、理想的なデザインのものを使いたいという一心で検討した結果が一月にわたる家族会議になったということだが、その観点が単なるかたちとしてのデザインではなく、かたちなきデザインとしてのもののエイドス(eidos)に及んでいたであろうことは容易に察することができる。まさにそれぞれの洗濯機がもつ構想力を見きわめる作業であったからこそ、ただならぬ構想者としてはおのずと熱が入ったのだろう。

視点をグレートブックスに戻そう。このようにみえてくるとあらためてグレートブックスとはつくづく珠玉の構想力の産物であることに気づく。珠玉の構想力、それは類い希なビジョンをもってデザインされたコンセプトを背骨にし、時代をアジテートし、歴史に確実なイニシアティブを刻み込んだ力である。しかもその力は基本的にいつの時代にも求められる構想力にその力を分与しつづけるほど強い。それゆえにそれらの書物はあたかも構想力の発電所のようになりながら絶えることなく読み継がれているという姿がみえてくる。著作『余録と補遺』のなかでショーペンハウアーは語っている。「ほとんどの思想は、思索の結果、その思想にたどりついた人にとってのみ価値をもつ。ただ少数の思想のみが、読者の反響を通じて働き続ける力をもつ」。この反響とは彼が糾弾する時々の流行ものではなく、人間精神の基底においてかなりの普遍性をもって働く力に対する共振であることはいうまでもない。

グレートブックスのなかには発刊された当時は世に受け入れられなかったものが少なからずある。発禁をおそれて周到な工夫が凝らされたものもある。たとえば、プラトンの偉大なる仕事はソクラテスの死を契機にはじまったことはよく知られている。ソクラテスの対話の書き記しは師の死に至る由縁をソクラテスの意向を超えて後世に伝える使命感によって果たされたものであったと思えるし、同時にその手法を通じてソクラテスを盾にしてみずからの思想を埋め込んでいったこと

や、それが現代にまでよく保存されたことの結果には、そこに幾重にも重なる周到な構想をみることができ(半田智久 2004 セブンリベラルアーツ成立前史：その淵源にみるプラトンの構想、構想 3, 69-75)。むろんプラトンはそんな構想のことなどおくびにも出さず、ソクラテスをしてただ慰みごととして書くにすぎないとすかしているけれども。

同じようにグレートブックス中のグレートブックスといえるであろうデカルトの『方法序説』は、幅広い読者層を想定してフランス語で書かれたことが知られている。だが、その意図には単に広範囲にわたる啓蒙にあったというよりも、ラテンの限定された世界に投げ入れたらたちまち握りつぶされるという読みがあったのだろう。実際同書はそのことばの地であるフランスではなくオランダにおいて匿名刊行され、しばらくのあいだフランスへは公式ルートでは流通しなかったことが知られている。あきらかに彼は同時代の人たちというよりも、彼がその遠大なビジョンをもって見据えた未来世界の人びとに対して書いたのであり、その奥行きは現代のわたしたちにまで及んでいたことが確認できるわけである。

グレートブックスの名に値する作品は等しくその思想や主題の展開がとてつもなく大きなパースペクティブのもとに広がっている。だから、いつもなお先々に向けて新鮮なのである。

そういう時代のいまだからこそ

先にあげたショーペンハウアーは読書が学ぶことのはじまりであることはまちがいないが、読むことそれ自体に留まるならば無意味だと警告する。その先の思索こそがだいじだと強調する。わたしたちがクラシックスに接するとき、そこに書かれてあることの内容が現代からすれば時代の大きな隔たりのなかで、ほとんど通用しなかったり、すでに乗り越えられていることも当然多くなる。だが、それは読んだ内容そのものに学校教育の教科書のごとく正解の記号情報として知ろうとするかぎりのことにすぎない。それではショーペンハウアーのいう単なる読書で終わることだから、もともと意味が希薄なのだ。クラシックスの偉大さは書かれてあることをこんにちに移調し、その上で思索し、論じるときにいつも新たな発見に出会うことが多いところにある。書かれてあることそ

のものというよりも、そこから先に広がる思索展開に時間を越えた見通しがたてられているというその驚くべき構想力を実感できるのである。

わたしたちが生きる今という時代は20世紀につくりだされ通用してきた多くの大きなシステム、あるいは思考規範に対して根底からの刷新を要請している。それらのいくつかはすでに瓦解し、もはやかつてではなくなっているけれども、大半は「生き残りをかけて」という文句とともにまさにいま苦闘のさなかにある。だが、その表現がすでに半ば暴いてしまっているように、そのほとんどは延命の営みに入っている。つまり、寿命が来たことを認めざるを得ないところにきているのである。だから、多くは処方方を講ずるというよりもむしろずっと大きな判断が必要な段階にきている。この現実を有耶無耶にすれば、その延命策に巻き込まれていく人たちに言い訳ばかりで決して楽しくはなく、結果的には無力感を味わうことになる仕事をつくりだしていただけとなろう。それは延命治療が生命倫理の課題であることそのままに、まさにいま働く人たちの生活の質や生き甲斐、労働ないし仕事の倫理にかかわる問題になってい

るときえいえるだろう。

そういう大きな変革の時代に生きているわたしたちであるからこそ、この先に投企される新たな構想と実践への要請はおのずと高まっている。わたしたちがグレートブックスから学べることは実に豊かだが、とりわけあまねく広がる惰性の諸々を断ち切り、新しい次元に進んでいく勇氣と、本質的なことがらを確実につかまえることのたいせつき、そして新たな価値創造に向かう心意気をそこから掴みとることができる。類い希な構想力のもとに結晶化されたグレートブックスがいまほど有効なエネルギー源になるときはない。

最後にショーペンハウアーのこぼれをもうひとつ引用して閉じたい。

「彼ら天才の生涯は悲惨であったが、愛の神がその御業のために彼らの守護に立ち上がりたまひ、ついにこのような人類の教師の苦闘は終わり、不死なる月桂樹の枝は、この教師を招き寄せ、時を知らせる鐘の音とともに、祝福の歌声もわきおこる。重き鎧も、今は翼ある衣、苦しみは束の間、喜びは永遠」。

2005年6月30日 受稿